

Title	懐徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について：デジタルコンテンツとしての位置づけ
Author(s)	湯浅, 邦弘; 杉山, 一也; 竹田, 健二 他
Citation	中国研究集刊. 2000, 27, p. 45-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60873
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について

——デジタルコンテンツとしての位置づけ——

湯浅邦弘 杉山一也 竹田健二 藤居岳人 井上了

享保九年（一七二四）、大坂の町に誕生した「懷徳堂」は、五同志と呼ばれる町人たちによって運営され、広く町人層に開放された異色の学問所であった。

享保十一年（一七二六）、懷徳堂は江戸幕府から官許を得、大坂学問所として公認された。その際、懷徳堂初代学主の三宅石庵（号は萬年）は、『論語』と『孟子』の各首章についての記念講義を行った。その筆記録が、大阪大学懷徳堂文庫に『論孟首章講義』として残されている。本稿は、その内容を紹介しつつ、初期懷徳堂の基本精神を明らかにすることを第一の目的としている。

また、これら日本近世の古書類は既に二百年以上の歳月を刻むものもあり、その保存の検討は刻下の急務となっている。そこで、本稿では、この『論孟首章講義』の電子情報化を第二の目的として掲げたい。即ち、本書をデジタルコンテンツと位置づけ、これをいかに電子情報

化し、公開していくかという課題について、現在推進中の具体的な作業について中間報告を行うこととする（注1）。以下、書誌情報に関する「解題」に続き、「本文」およびその「現代語訳」、右の二つの課題に関する「解説」を掲載する。

解題

・書名：表紙題簽および扉に「萬年先生論孟首章講義」（まんねんせんせいろんもうしゅしゅしょうこうぎ）と記す。『論語』『孟子』各々の冒頭の一章について講じたことに因む。「論孟首章講義」は通称。

・冊数：一冊。

・外形：縦二二・七cm×横一六・四cm。

・印記：「天生寄進」、「懷徳堂図書記」、「大阪大学図書之印」、「昭和29.12.22受入/104891」。

- ・丁数…全十五丁。
- ・表記…漢字カタカナ交じり文。
- ・筆者…享保十一年（一七二六）十月五日に三宅石庵が行った講演の筆記録であり、一部修訂の跡が見えるが、筆記者・修訂者とも未詳。
- ・翻刻…明治四十四年（一九一）懐徳堂記念会より刊行された『懐徳堂五種』の中に全文が活字翻刻されている。但し、翻刻の基準に曖昧な部分を残す。
- ・内容…本文は、「官許學問所懐徳堂講義 享保十一年丙午冬十月五日癸亥 萬年三宅先生講」と題し、『論語』学而篇冒頭章、『孟子』梁惠王篇冒頭章の順で、各々の書名、首章の意味、文中主要語句の意味などについて、噛んで含めるように解説していく（以下の本文および現代語訳参照）。また、本書の末尾には、「浪華學問所懐徳堂開講會徒」として当日の講演を聴講した七十八人の名前が列挙されており、その中に五井藤九郎（蘭洲）、富永善右衛門（芳春）らの名も見える。なお、大正五年（一九一六）に設立された重建懐徳堂において、記念祭恒典を十月五日と定めたのは、この石庵の記念講演の日に因む。

本文

本文の翻刻に当たっては、以下の方針に従い、底本の形にできるだけ忠実に従うよう留意した。

- 1 底本には漢字の字体に不統一が見られるが、統一はせず、底本の表記に従った。ただし、あきらかに誤字と思われるものについては、修正を加えた。
- 2 「せ」(セ)・「子」(ネ)・「臣」(トモ)・「丁」(コト)・「メ」(シテ)・「也」(也)についても、底本の表記に従った。
- 3 仮名の表記について、濁点の有無に不統一が見られるが、これも統一はせず、底本の表記に従った。
- 4 底本で本文の右傍に修正が加えられている部分については、修正後の表記に従った。

官許學問所懐徳堂講義 享保十一年丙午冬十月五日癸亥

萬年三宅先生講

論語 論語ト云フハ孔子ノ論シ玉フ御辞ヲ、弟子タチカラ又ソノ弟子ヘ、云ヒ傳ヘ書ツタヘ、此書ニナルヲ、
論語ト名付

學而第一 學而ト云フハ発端ニ學而トアル語ヲ取テ篇ノ

名トセルニ、古ハ竹ノ簡ニモノヲ書ツケホリタテ、
 ナメシ革ニテアミテヲキタル故ニ、コトノ外カサダカ
 ナル故ニ、コノ書モ十卷廿篇ニシタルナリ○扱学ト云
 ヘルハ、何ヲ学ブモノゾ、道ヲ學ブニ、何ヲカ道ト
 云フ、人ノ道ニ、人ニアラザレバ各別、人ト生レタル
 モノハ、人ノ道ヲ学ハ子バナラヌト、鳥獸ナレバソ
 ノトヨリ、人ナレハ人ノ道ヲ学ブハジニ、故ニ道ト云
 フハ人ノ道、學トハソレヲ学ブニ、コノ道ヲ分テ云
 ヘハ、君臣父子夫婦兄弟朋友ノ五ツノモノガ、各道ニ
 カナフヨリ別ノハナヒゾ、畢竟君ハ君タリ、臣ハ臣
 タリ、父ハ父タリ、子ハ子タリ、夫ハ夫タリ、婦ハ婦
 タリ、兄弟朋友ハ兄弟朋友タルガ、人ノ道ニ、ソレデ
 ハ人ト云ハル、也、シカルニ氣質ノ偏ガ有ツタリ、耳
 目ノ欲ガアリテ、フト我が生レツキテアル道ヲトリ失
 フニ、ソレヲ失ナハズ、生レノマ、ナルガ聖人也、學
 トハソレヲマナブ也、ワガモトヨリモチテアル人ヲマ
 ナブ也、コレヲ學問トモ教トモ云フナリ、聖人已レガ
 知慧才覚ヲ以テ、ワザト立テ、教ヘ玉フニハ非ス、
 人ニモツタ道ヲ教ヘ玉フ也、スレハ人、ナルトニテ、
 セ子バナラヌト、シカルニ人、生レツキ習ハシニ
 サマノアルナル故ニ、ナカノ此方任ニテハ、ダ
 ウモナラヌト思フ人モアリ、又ツヒシレタト、ナニ

ノ別ノハナキト思フ人モアリ、ナルホドツヒシレタ
 トナレト、カルノシク見アナドルトニテハナク、又
 ダウモナラヌト云フハナヒゾ、聖人モ人此方モ人也、
 人ガ人ノ道ヲスルナレバ、ナルマヒヤウハナヒゾ、
 シカレドモ氣質ノ偏、耳目ノ欲ニサ、ヘラル、故ニ、
 シニクヒヤウニアルゾ、ソコカラダウモナラヌト
 思フ也、ツヒシレタ所ニ甚深微妙ノアルヲ知ラヌ故
 ニ、ツイシレタトカルノシク見アナドル也、コノ
 ニノモノハ、各ソノカタギノ偏ナル所ヨリ見アヤマレ
 ルモノナレバ、タゞ虚心ニナリテ、聖人ノ御コトバラ
 謹テ并服スベシ

孔子ハ聖人中ノ聖人也、天地開闢以來タゞ一人ノ聖人
 ナリ、米元章ガ贊ニ、孔子以前無孔子、孔子以後無孔
 子ト云ヘルトヨリ也、又宋ノ世ニ、アル堂ノ柱ニ、タ
 レカハシラズ、天不生孔子萬世如長夜ト書タリ、ヨク
 孔子ヲシレル者也、人、皆孔子ノ御恩沢ヲウケテヤレ
 ト、アマリ大厚恩ナル故ニ、ソレホドニ思ハヌ也、關
 夜ニ道ヲ行クニ、チャウチンノ火ヲカルハ甚タ其恩
 ノ厚キヲヨロコビテ、日月ノ明光ハ、ソノ御カゲヲ思
 ハヌニ同ジ、中庸ニ聖人ノヲ段、云フタルアトニテ、
 舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、
 霜露所降、凡有血氣者、莫不尊親ト云ヘルハ、孔子ノ

御事ヲ云ヘル也、子思将来ヲ見ヌキテ、カヤウニノ玉
 へリ、ゼンノ二四夷八蠻ノ国、マデモ、尊親スルヤ
 ウニナルゾ、ソノ孔子ノ御言ノアル論語ナリ、シカレ
 ハコノ教ノ御言ヲ聞ハ、コノト外ノ幸也、サレトコレ
 ヲツヒ讀タリキイタリシテ、スマシクニスレハ何ノ益
 ニナラヌ也、トクト己レガ心ニ立カヘリ、思フテミ子
 ハソノ意ハ得ヌモノ、思フバカリハ又用ニタ、ズ、
 我身ニテ行ナフテミ子ハナラヌ也、トクト思ヒ身ニ
 行ナフテ、ミタル上ニテ、イカヌハ師友ニタヅヌル
 也、又世上ニ、論語ヨミニノ論語ヨマズト云フアリ、
 又論語ヨマズノ論語ヨマズト云フアリ、イツレモ尤ナ
 ル也、論語ヨミニノ論語ヨマズハ、学者ガ自ラソノイ
 マシメニスルハヨシ、世上ノ學問セヌモノカラ云ヘハ
 甚無道ト云ヘシ、論語ヨマズノ論語ヨマズト云フハ、
 世上ノ不学ナル者ノ、自ラ云ハ警ニナリテヨキ也、
 學者カラ云フハ甚無道、トカク我不是ナル所ヲ考フ
 ルヨリ外ハナキ也、我ヲ是トシ、人ヲ非トスルハ、
 甚タアシキニテ、皆人ノ通病ナリ、聖人ノ心ニテモ、
 自ラ是トシ玉フハナキ也、況ヤソレヨリ下ノ者ハ、
 ナヲ以テノ、自ラ己レガ是非センサクスルハ無
 用ノ也、タゞ己レガ非ヲ隨分ト吟味シテ、ソノ非ヲ
 去ルガ人ノ道也、人ノ非ヲセンサクスルハイラヌ也、

人ノ是ヲ取テソレヲスルガ道也、コ、ヲヨク合点スヘ
 キ肝要也

子曰學而時習之不亦說乎

學プト云ハマ子マナブ、サキカラコノ方ヘ一トヨリ
 マナビウクル也、習ハ手前ニテトクトナラフ也、
 ナレナラフナリ、時ハ時ヨリゴトニウチヲカヌ、
 説トハ、ドコトナク心ノソコニウレシク思フ也、不
 亦說乎ト、ウラカラノ玉ヒテ、何トマタヨロコバシフ
 ハアルマイヤト、人ニトクト思ハスル意、サテ人ノ
 生レツキハ、元來道也、善也、故二道ト云ヒ、善ト云
 フモ、皆我ニアルモノ也、シカレト、氣拘物蔽ノマチ
 ガヒアリテ、己レニ天ヨリウミツケ玉フモノヲトリ失
 ナフナリ、ソレヲ失ナハヌ人カ聖賢ニシテ、我ヨリ先
 ニサトル人ナリ、ソレヨリ以下ハ、ソノ御カゲニテ
 ソノ教ニシタガヒテ、後ニサトルモノ、故ニ目ヲアキ
 キテサトルニアトサキアリ、アトノ者ハ先ニ目ヲアキ
 テサトリシ人ノ如クニスル也、ソノヤウニシテ間斷ナ
 キト、凡人ヨリ聖人ニモ至ル也、シカレト始カラ、先
 學ノヤウニハナラヌナリ、一トホリ学ヒテモ、手前ニ
 テ時ヨリニトリ出シテハ、ナレナラヒ、ヒタトクリカ
 ヘシ、思フテ見タリ行ナフテ見ルトキハ、始めシ
 ブリテスマヌモ、イツゾノホドニハホツコリト合点

ガイクモノ也、始メシテミテモシブリテイカヌ^レモ、スラリトイクヤウニナル也、ソノ時ハ心面白クナリテ、ヤメラレヌヤウニナリ、ヒタモノカヤウニナリモテユケバ、段々進ムヤウニナル也

有朋自遠方來不亦樂乎 朋ハ我カ同類也、遠方カラサヘ來レハ、近キ所ノ者ハ云フニ及ハズ來ル^レ、己レガ學德アレハ、ソノ類ナ者化スルナリ、近キ所カラモ遠キ所カラモ來ル也、コレデハ心ヲモシロイガイヨク^レツノリテ、樂ムハツナリ、樂トハ心面白クテタマラヌナリ

人不知而不愠不亦君子乎 人不知トハ我レニ學アリ德アリテモ、人ガサウハ思ハズ、善アリテモ善デナキヤウニオモヒ、却テアシキヤウニ云ヒナサレナドスル^レ也、愠ハ心ノソコニナニトヤラ、カウハナイハヅ、コノヤウニハアルマヒ^レナルニナド、ドコトモナク思フ莫ナリ、君子ハ學ヲシテコノ道ヲ得タル上ニテ德トナリタル者ヲ云、我ガ是ニテモ、人ガ是ト思ハズ、善ニテモ人ガ惡ト思フト、カウハアルマヒ^レヲ、イカニシテモキコヘヌ、此方ニアシキ^レハナキモノヲト云フモノガ、心ノソコヘ出ル也、モシスコシニテモソレガ出ルト、ホンノ學問ノ仕様ニアラズ、學ハ人ニシラスタメニアラズトハ合点シラレト、凡情ノハナレヌト、ソノヤウ

ニソシラレ思ハル^レト、心ノソコニカウハアルマイ^レジヤトイキドホル也、シカルニ己レヲイカヤウニソシリテモ、心ノソコニ少モ何トモ思ハズ、タゞ此方ヲシテユクヤウニナリタルガ、徳成就ノ君子ナリ、

○サテコノ章ヲ此書ノ最初ニヨキタル^レハ、記者ノ心アル^レ、學問ハコノ通りヨリ外ハナキ也、聖人モタゞコノ通ニナサル、ヨリ外ナク、凡人モコノ通り也、學而時習之トハ、身一ツノ^レ、有朋自遠方來トハ、人トトモニスル也、我カ^レ人ノ^レコレニテスムナリ、サテ左様ノ人ニテモ、人ガ知ラズ、却テソシルハ變ニメ逆境ナリ、有朋自遠方來ハ常ニメ順境ナリ、人々善ヲ好ミ惡ヲニクムハ本心ノ同シキ所ナレハ、學而時習之テ、心オモシロクナリタル人ハ、皆人ノ尊ミシタシムハヅ也、故ニワガ身一ツガヨクテモ人ヘヲシウツラ子バ、己レガ德ノ至ラザル也、ソレニテモ常ニシテ順ナレバトノシク、變ニ處テ逆ナル時ハ愠ルハ、イマダタラヌナリ、此章ノ通りニテハ、順逆常變カハル^レナキ也、聖人モコノ通り、凡夫モコノ通りニシテユクヨリ外ハナキ也、サテ今日ハ今日ノ己レカ身一ハイノ説ヒタノシミ不愠アリ、ソレガ今日一ハイノ君子也、明日ハ又明日也、マヅ今日ノ君子ヲスグニフミコンデシテユクガヨキ也、ソレデハ今日己レ相應ノ君子ト云フモ

ノナリ、トカク明年ハ明年、スグニフミコンデ今日只今ヨリ、シテユクガヨキナリ、此ヨウニシテ間斷ガナイト、凡人ガ聖人ニナル也、別ニカハルヲナヒケレト、フミコマ子バナラヌナリ、道ハ難キニモ非ズ、又易キニモ非ズ、タゞソノトヨリニシテユクニ有ルニ、聖人ヲ本心カラ見合セ、本心ヲ聖人デシテユク也、氣質ノ偏、耳目ノ欲ト云フモノガ、サマタゲテ、アトニヅリヲスルナリ、ソレヲフミヤブリ、一途ニフミコンデユクガヨキ也、トカクシサヘスレバナナルヲナリ、ナラヌヲ教ルニハ非ズ、ソノ学ハイカヤウニスルゾナレバ、孝弟ヲ以テ手始メニスルヲナリ、故ニコノ章ノ次ニ有子ノ孝弟ヲトカレタル章ヲノセラレタリ、コレ記者ノ微意也

孟子

梁惠王章句上 論語ノ例ニ同シク、篇首梁惠王ノ文字アル故ニ、篇ノ名トス、章句トハ、言ノ内ニアルヲ、言ヲツミテ句トシ、句ヲツミテ章トシテ、始終ヨクキコユルナリ、後漢趙岐ト云フ人、コノ書ヲ注シ、章句ト名付ケタリ、ソノトヨリヲ用ヒタル也

孟子見梁惠王—— 孟子ノ時ハ孔子ヨリ百年アマリ過タリ、孔子ノ時ハ周ノ末ナレト、マダ人ガ仁義礼樂モ悉

クトリ失ナハズ、孟子ノ時ニ至リテハ、タゞ功ヲ興シ、利ヲ起ス心ノミニナリテ、仁義礼樂ノハ地ヲハラフテ知ラヌヤウニナリタリ、故ニ孔孟スベテノトキヤウカハレリ、孔子ハ仁ヲトキ玉ヘリ、孟子ハ仁義ヲソロヘテトケリ、孔子ハ徳トノ玉ヒ、孟子モ徳ヲトケト、多クハ心ト云ヘリ、イヅレモワケアルヲ也、孟子ノ時ハ人ガタゞ利ヲ好ムノミナル故ニ、コノ利心ヲクヂカシタメニ、義ヲソヘテトク、人ノ利心ヲクヂクニハ、義理ノ心ヲ以テセ子バナラザルガ故ナリ、徳ト云ヒ、心ト云フチガヒハ、同シクハ徳ト云フガヨイケレト、末ノ代ニナリテ、タゞ徳トバカリ云ヘハ、シカトソノ人ノ心ヘコタヘズ、コノユヘニ直ニ心トヨビテ、人ニ心ヲツケサスル也、コレニテハタレニテモ我ニコタヘテ合点ユキヨイユヘナリ、故ニ仁義ヲソロヘテ、心ヲトクハ、時代ノヲトロヘタレバ也、見ハ、ミルトヨムガヨイゾ、マミユトハ、出テ目見ヘヲスルヲナリ、コ、ノハタゞアフヲ也、コノ時ハ戦国ニテ諸国ニ士ヲ用ヒテ、士ノハヤリシ時也、惠王礼義ヲ厚クシテ、孟子ヲ招待セラレタユヘニ梁ヘユク也

王曰叟不遠千里而來亦將有以利吾國乎

叟ハ、ヲキナ也、年タケタル人ヲヨブコトバ也、千里ト云フハアナガチ千里ニカギルヲデハナイゾ、タゞ遠

キヲ云ナリ、利ト云フハ、利欲ノ利ニテ、勝手ノヨ
 イ也、元來利ト云ハヨヒナレト、利スルト云フト、
 ムサボリテ勝手ヨキヲシテユクニナル也、惠王ノ
 心ハ此時兵ヲ挙テ、諸国戦タル故ニ、國ヲ富シ兵ヲ強
 スルヲノミヲ第一トセリ、利スルト云フハ、其ナリ、
 コレハ當分、鼻ノサキノ勝手ヨキ所ニ、叟ニハ千里ノ
 遠キヲ遠シトモ思ハズ、来ラレシハ、コナタニモ、亦
 手前ノ國ノ勝手ノヨイヤウニナサレウト思ハル、デア
 ランカト、コノ時ノ諸士ミナ富國強兵ノ術ヲ以テ、
 諸侯ニス、メシユヘニ、亦ト云ヘル也

孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已矣

コノ時ニハ、世上ニ仁義ノ沙汰ナクナリテ、タゞ利ト、
 云ヘルノミナル故ニ、王ノ問モ利ノ也、先コノ
 利心ヲクチキ、破ラ子バ、何ノ道モトカレヌナリ、故
 ニ先利ヲクチクニ、コナタノ身デ、ナゼニ利ト、イハ
 フノト思シメスゾ、ソレハ甚タ御無用、タゞ仁義ト
 云フモノアルノミ也、コノ仁義ノ外ハナキ也、○サテ
 仁ノ字ヲヨマハ、メグミトヨムベシ、義ノ字ヲヨマハ、
 コトハリトヨムベキ也、本心ニテ物ノアハレヲ知ルガ
 仁ナリ、物ノワカチヲ知ルガ義也、コレ皆本心ニアリ
 テ、アハレヲ知リワカチヲシルナリ、或ハ氣カラ出ル
 モアリ、見聞カラクルモアリ、ソレハ真ノ仁義ニ非ズ、

真ノ仁義ハ、本心カラワキ出ル也、人ノ本心ニアル
 仁義ナル故ニ、自ラ考ヘミルベシ、仁義ニ似テ、仁義
 ニ非ルモアルニ、而已矣トハ、コノ外ハナヒト云フコ
 トバ也、タゞ梁王ノミニアラズ、士庶人マデモカヤウ
 也、上タル人ハ別メナリ、戰國ニハナヲ以テ、コ、ヲ
 心得子バナラヌ也

王曰何以利吾國——王ハ一國ノ君ナル故ニ、王ノ云ヘ
 ル利ハ國ノ利也、太夫ニハ家ト云ヒ、士庶人ニ身ト云
 フ、コレコトバノ立ヤウノ例ナリ、万乗ノ乗ハ、車ノ
 數ナリ、古ハ車戰ナリシ故ニ、ソノ武ノ備ヘニ車アリ、
 ソノ車ニツク大將士卒ノ手クバリ定リテアリ、故ニ身
 代ノ數ヲ車ニテカソヘタリ、サテ鼻ノサキノ利ヲ求ム
 レハ、害ガアトヘツイテマハルヲ、孟子仔ラレタゾ、
 利ハ身ノ勝手ニヨキナレト、ソレヲ好ムト却テ勝手
 ニワルイヲガヒツソウテクルヲ、トクナリ、コナタ
 ガ何デ勝手ヨクセウトノ玉ハ、上ラマナブ下ナレバ、
 ソレカラハ勝手ヨクセウト云フガ、ドコモカモハヤ
 リモノニナリテ、各ソノ身上相應ニ、アチカラモコチ
 カラモ、トカクメンノニ勝手ノヨイヲセウズノ
 ト思フノミニテ、相イトヲシミシタシム心ナクナラン、
 コレハ甚ダ危キニ極リタリ、ソノ國危キト云フハ何
 ゾナレハ、万乗ノ國ニテ、ソノ君ヲ弑スル如キ大逆無

道ヲスルハ必ズ權勢モアリ威望モアル千乗公卿ノ家ナリ、千乗ノ国ナレバ必ズ百乗ノ家カラスルコトナリ、シカレバコレヲハ皆十分ノ一ツナリ、万二千、千二百也、スレバスクナシトハイハレズ、ソレデ足ルハツナレト、モシカノ義ヲツギニシ、利ヲオモトシ先ニスレバ、トリテモノ、足ラヌハツ、欲ニイタゞキナキ故ニ、君ノ國モ位モ奪ハ子バタンナウセヌヤウニナリテ、弑逆ニ至ルナリ、スレハ一タビ利センコトヲ云フハ、甚ダ國ノ危キコトニアラズヤト、

未有仁而遺其親者也未有義而後其君者也

仁而、義而ト云フハ、仁義ヲスル者ハ、利ハ世子臣自ラ利ガツイテマハル也、トカク仁義トバカリガヨキト也、仁愛アル者ガソノ親ヲ打ステ、カマハヌ者ハナク、義ヲ知りタル者ガ君ヲ打ステカマハヌト云フコトハナキコト也、仁愛アル者ハ親ニアツク、義アル者ハソノ君ニアツキ也、然レハ王ガ仁義ヲ好ムト、大夫モ士モ下、モ、仁義ガハヤリテクル、ソレデハコナタヲ親ノ如クニシタシミ君トシテ、大切ニ思フ也、サスレバ却テ御為メニナランホドニ、タゞ仁義ノコト存セラル、外ハアルマジキコト也、ナゼニ利トノ玉フゾト也、サテ仁義ト云フ者ハ、元來人ノ本心ニソナハリテアルモノナリ、利欲ハフツト心ノクセガツキテ、ソノヤウニナリタル

後デキナリ、後デキノモノガ、元來我ニ根ザシタル仁義ヲ失ナフコトハヨシキコト也、利欲ハツイ鼻ノ前ノモノナル故ニ、ツイソノタメニウバハル、ナリ、仁義ハワスレヤスキモノナリ、人、コレ、故ニ孟子七篇ノ書、コノ氣味ガヲモニナル、今ノ人デモコノ合点ヲヨクセ子バナラズ、上王公ヨリ、下匹夫ニ至リテモ、コノ合点ヲセ子バナラヌコト也、利ヲ好ム心フカク、仁義ノ良心ヲ失ナヘハ、終ニハ家國天下ヲモ失ナヒ、身モ失ナフニ至ル、君子小人ノワカル、モ、仁義ト利欲トノ間也、純一ノ仁義ナレバ、利欲ノ心ハナキ、利欲ノ心甚シクナレハ、仁義ノ心ハナクナル也、故ニ聖賢君子ハ、仁義ノ心純一ナリ、中位ナルモノハ、仁義ノ心モカタノコトニアリ、又カウスレハ勝手ニワイルト云フ利欲ノ心モカタノコトニアリ、コ、デ学問ガイルコト、コ、デ工夫ヲ用フルコト、世上ヲ見レハ人々タレモ義理ノ心アルモノナリ、サレバ勝手ニヨイコトハシタヒハツナリ、故ニ利欲ノ念モアルナリ、コノ二筋アル内、利欲ノ念ノ方ヘハヒキヅラレヤスキナリ、ソレデモ世上ノ人ナミニ、ゴミヲニゴシテトタルハ、此方ノ利ヲ彼方ヨリ義デヲサヘテサセズ、彼方ノ利ヲスルヲバ、此方ヨリ義ニテヲサヘテサセズ、此モチアヒニテ、ゴミハニゴス、コレデハ一拍子チガフト、危キモノ也、

一人ノ心ニモコレアリ、カタ心ニハ義理ヲ思ヒ、カタ心ニハ利ヲオモフ、サテ利ニハヒカレヤスク、義理ノ方ヘハカヘリガタシ、コレ甚ダ危キ也、故ニ身ヲオサムル人ハ、仁義ノ心ヲ以テ、利欲ノ念ニカツヤウニ世子ハナラズ、國ヲ治ル人ハ、世上ニ利心ガハヤリヤミテ、仁義ノハヤルヤウニスベキ也、サテ胸中ニ、仁義ト利欲トガ相戦ヒテハ、甚ダ工夫せ子バナラヌ也、子叟ノ如キ賢者デモ、コ、ニ病メル也アリ、ヨクノ工夫スベキ也、サテ利ト云フモノカ、タゞ勝手ノヨキ也ニテ、コレニ咎ハナケレト、ソコニ好ミガツクガ、利スルト云フモノニテ、コレデアシキ、利スルト云フガ利心利欲ナリ、タトヒ身ヲ亡ボサズトモ、天ヨリウケシ大事ノ本心ヲ失ナフヤウニハナル也、トカク仁義ノ心ガ、利欲ノ念ニカツヤウニスルガヨキ、コノ利心ト云フモノハ、イヅクマテモコマカニイリワタリテアルナリ、チヨツト身ノ立フルマヒニモアル也、同ジヤウナル也ニテモ、義カラ心ガ出ルト、我ガ勝手ノヨキヤウニスルトノカハリアル也、コ、ヲヨク考ヘ子バナラヌ也、君子ノ心ハ明カニシテ、ヨクサキノ手ガ見ユル也、利欲ニクラマサレ子バ、小人ハ、心ガ利欲ニクラマサレテアル故ニ、鼻ノ前ノ利バカリニテ、遠ク見ヘヌナリ、鳥獸ノ心ガコレナリ、人、ヨ

クコ、ニ於テ、カヲ用フベキ也ナリ

現代語訳

官許学問所懷徳堂講義

享保十一年丙午冬十月五日癸亥

万年三宅先生講

論語

『論語』というのは、孔子が論じられた御言葉を、(孔子の)弟子たちからまたその弟子たちに言い伝え書き伝えて、この書物になつたものを『論語』と名づけた(ものである)。

学而第一

「学而」というのは、「この篇の」発端に「学而」とあるのを取つて篇の名としたものである。昔は竹簡に文書を書いたり刻んだりして革紐で編んでおいたので、非常にかさばつたので、この『論語』という「書物も十卷二十篇としたのである。さて、「学」というのは、何を学ぶのか。道を学ぶことである。何をもって「道」というのか。人の道である。人でないものならばともかく、人と生まれたものは、人の道を学ばねばならない。鳥獸ならばそのまま(でよいが)、人ならば人の道を学ぶはずである。だから「道」というのは人の道であり、「学」とはそれ(人の道)を学ぶことである。こ

の「道」を分けて呼ぶならば「君臣」「父子」「夫婦」「兄弟」「朋友」の五つのものが各々道に適うこと〔であつて、これ〕より他のことはない。畢竟、君主は君主らしくあり、臣下は臣下らしくあり、父は父らしくあり、子は子らしくあり、夫は夫らしくあり、妻は妻らしくあり、兄弟・朋友は兄弟・朋友らしくあることが、人の道である。そうして〔はじめて〕人といわれるのである。しかし、氣質（その人を構成する物質）に偏りがあつたり、耳目の欲があつたりして、つい自分の生まれつきの道を取り失つてしまふ〔ことがある〕。それ〔道〕を失わず、生まれついでそのままであるのが「聖人」である。「学〔ぶ〕」とは、それ〔道〕を学ぶことである。自分が本来持つてゐる「人〔の道〕」を学ぶことである。これを「学問」とも「教」とも呼ぶ。聖人は、自分の智慧才覚によつて殊更に〔ありもしない〕「道」を立てて教えるのではない。人が本来持つてゐる道を教えるのである。だから〔道を学ぶことは〕、人々〔自身について〕のことであるから、しなければならぬことである。しかし、人々の生まれつきや習慣は様々であるから、われわれ凡人にはどうにもならないことだと思ふ人もある。また、〔そんなことは〕いうまでもないことだ、格別のことではないと思ふ人も

ある。なるほど、いうまでもないことではあるが、軽々しく侮るべきことではなく、また、どうにもならないと言ふこともない。聖人も人であり、われわれ凡人も人である。人が人の道を行うのであれば、できないはずがない。しかし、氣質に偏りがあつたり、耳目の欲に惑わされたりするため、〔その当然の道を〕行いにくいようになつてしまひ、そこから、どうにもならないことだと思ふのである。いうまでもない所に甚だ深く微妙なことがある、ということを知らないために、いうまでもないことだと軽々しく侮つてしまふのである。この二つのもの（通弊）は、各々その氣質に偏りがあるところから見誤つたものなので、ただ虚心になつて、聖人の御言葉を謹んで承るべきである。

孔子は聖人中の聖人であり、天地開闢以來ただ一人の聖人である。米元章の贊に「孔子以前に孔子無く、孔子以後に孔子無し」（米芾べいひょう「孔子贊辞」）という通りである。また、〔中国の〕宋の時代に、ある学堂の柱に、誰がかは知らないが〔もしも〕天が孔子を生まなければ、〔以降の〕万世は長夜のようだったであろう」と書いたが、〔これは〕よく孔子を知る者である。人々はみな孔子の恩沢を受けているが、あまりにも大きい恩であるため、〔却つて恩沢が〕それほどと思つていない。

「これはたとえば、」闇夜に道を行く際に、提灯の火を借りると恩の厚いことをありがたく思い、日月の明光に対しては恩恵に感謝しないようなものである。『中庸』に、聖人について述べた後に「舟や車で行けるところ、人力の通ずべきところ、天が覆うところ、地が載せるところ、日月が照らすところ、霜露のおちるところ、すべて血気を有するもので、尊び親しまない者はない」と言うのは、(聖人である)孔子のことを言ったのである。(『中庸』の作者である)子思は、将来「孔子の教えが広まること」を見通して、このように述べたのである。「つまり」徐々に「中国以外の」四方の夷狄や八方の蛮人の国までも「孔子を」尊び親しむようになるぞ(ということである)。その孔子の言葉の記されている『論語』である。だから、この教えの御言葉を聞くことは、ことのほか幸せなことである。しかし、これを何となく読んだり聞いたりして済ませたならば、これは何の益にもならない。しっかりと自分の心に立ち帰って考えてみなければ、その意図を習得することはできない。「しかし」考えるだけでもまた役に立たない。自分自身で実行してみなければならぬのである。しっかりと思いまた自ら行ってみて、それでも「うまくいかなければ、師友にたずねることだ。また、世間で

は「論語よみの論語よまず」ということがあり、また「論語よまずの論語よまず」ということがある。これらはいずれも、もつともなことである。「論語よみの論語よまず」とは、学者が自ら戒めにする(言葉として)は良いが、世間の学問をしない者から言うならば、これは極めて無道なことである。「論語よまずの論語よまず」とは、世間の学問をしない者が自分で言うのならば自警になって良いことであるが、学者から言うならば、極めて無道なことである。自分の非な所を顧みるより以外のことは無用である。「これに対して」自分を(是として他人を非とすることは、極めてよくないこと)で、人の通弊である。聖人の「優れた」心を以てしても、自分を是とすることはない。いわんや、それより以下の者は、なおのことである。自分で自分の是を探し求めるのは無用のことである。ただ自分の非を吟味して、その非を取り除くことが人の道である。人の非を探し求めるのは無用のことであり、人の是なる点を取りあげて、自分でも「それを」行うというのが人の道である。ここをよく諒解するべきことが肝心である。

子曰学而時習之不亦説乎
「学ぶ」というのはまねて学ぶことで、相手から自分へ一通り学び受けとることである。「習う」は自分自

身で念入りに繰り返すことである。慣れるまで繰り返すことである。「時に」はその時その時ごとにそのままにしておかない〔で繰り返す〕ことである。「説ぶ」とはどことなく心の底にうれしく思うことである。「また説ばしからずや」と反語を用いて述べて、何とまたやるこぼしいことではないかと、人にしつかりと思わせる意味になる。さて、人の生まれつきは元々「道」であり、「善」である。従つて、「道」というものも「善」というものもみな自分の中にあるものである。しかし、氣にとらわれたり物に覆われたりといった誤りがあつて、自分の中に天から生みつけられたものを失つてゐるのである。それを失わない人が「聖賢」であつて、「聖賢」は「自分より先に悟つてゐる人である。「聖賢」より下の人は、その恩恵によつてその教えにしたがつて、後から悟る者である。従つて、目を開いて悟るには先と後とがある。後の者は先に目を開いて悟つた人のようにする〔べきである〕。途切れることなくそのようにしていると、凡人から聖人にもなることができる。しかし、始めから先学のようにはならない。一通り学んでも、自分自身でその時々〔要点を頭から〕取り出しては慣れるまで習い、しじゅう繰り返し繰り返し、考えてみたり実行してみたりしていると、最初

はなかなかできなかったことも、いつしかしつくりと合点がいくようになるものである。最初はやつてみてもなかなかできなかったことでも、すらすらとできるようになる。その時には心が愉快になつてやめられないようになり、ひたすらこのように成し遂げてゆくと、段々「徳」に進んでいくようになる。
有朋自遠方来不亦樂乎

「朋」は自分の同類である。遠方からさえ訪ねてくるのならば、近いところにいる者は言うまでもなくやつてくる。自分の「学問」と「徳」とがあれば、その同類の者は感化される。近いところからも遠いところからも〔自分の同類が〕訪ねてくる。このようであつたならば心の愉快がいよいよ増してきて楽しくなるはずである。「樂」とはおもしろくてたまらないことである。

人不知而不愠不亦君子乎

「人知らず」とは自分に「学問」があり「徳」があつても、人がそのようには思わず、自分に善があつても人に善でないように思われ、かえつて悪いように言われたりすることである。「愠」は、心の底に何となくこうではないはずだ、このようなことではないのになどと、何とはなしに思うことである。「君子」は「学問」

をして「人の道」を会得したうえに「それらが」「徳」となっている者をいう。「もう一度、「愠」を説明すると」自分が正しくても人が自分のことを正しいと考えると、自分が善であつても人が自分のことを悪だと考えていると、こんなではないということはどうしても人になわかつてもらえない（「のは嫌だ」、また自分に悪い点はないのにというようなものが心の底に出てくる。もし少しでもそのような考えが出てくると、「それは」本當の学問の姿ではない。「学問」は人に知らせるためにするものではないと頭ではわかかっていても、凡人の感情から離れることができず、そのように非難されて思われていると、心の底にこんなことではないのだといきどおることである。それに対して、自分がどのようにな非難されようとも、心の底で少しも何とも思わず、ただ自分のしたいように自然に振る舞っているのが「徳」の成就した「君子」である。

さて、この「学而」章をこの書（『論語』）の最初に置いているのは編者の考えがあつてのことである。学問はこの章で言われている通りのこと以外ではない。聖人もただこの通りにするほかはなく、凡人も同様である。「学んで時にこれを習う」とは、自分の身一つについての「学問の」ことである。「朋有り遠方より来た

る」とは、人と共に「学問」することである。自分のことも人のことも全てこれに含まれる。さて、以上のような人について、人が自分のことを知らず、かえつて悪く言うのは「変（異常）」であつて「逆境」である。

「朋有り遠方より来たる」は「常（正常）」であつて「順境」である。人々が善を好んで悪を憎むのは「それぞれの」本心の同じところに基づくのであるから「学んで時にこれを習」つて心が愉快になる人は、みなどんな人でも尊敬し親しく思うはずである。従つて、自分の身一つだけがよくても、人に「そのよい点を」感化できなければ、それは自分の「徳」がまだ十分ではないということである。そう（人を感化することができ）であつても「常」であり「順」であれば楽しく、「変」に居て「逆」である時にいきどおるのでは、まだ「徳」は不足している。この章の言うとおりであれば、「順」「逆」「常」「変」（のどの状況）であつても、「自分の取るべき態度は」変わることはない。たとえ聖人であつても凡人であつてもこの通りにするほかはない。さて、今日一日は今日一日で自分の身に十分のよろこびや楽しみ、またいきどおらないこと（という目標）がある。それが今日一日最大限の「君子」である。明日一日はまた「別の」明日一日である。まず

〔最低限〕今日一日の「君子」を（めざして）すぐに頑張つて実行するのがよい。それが今日一日、自分にふさわしい「君子」というものである。いずれにせよ来年は来年である。すぐに頑張つて今日この時から「君子」をめざして」実行するのがよい。このようにして途切れがなくなつてくると、凡人が聖人になつているのである。別に「目に見えて」変わることはないけれども、頑張つて実行しなければならぬ。「人の道」は難しいことでもなく、また容易なことでもない。ただ以上の通りに実行してゆくことに「要点が」ある。聖人を本心からよく見て、本心を聖人になうように実行してゆく。「得てして」氣質の偏りや耳目の欲というものが邪魔をして後じさりする。それを踏み破つて一途に頑張つて実行するのがよい。とにかく実行しさえすればできることである。できないことを教えているのではない。その「学問」はどのようにするのかという、孝行と悌順とをまず手始めに実行することである。従つて、この章の次に有子が孝行と悌順とを説かれた章を載せている。これが編者の意図である。

孟子

梁惠王章句上

『論語』の体例と同じく、篇首に「梁惠王」という

文字があるので、それを篇の名前にしたのである。「章句」というのは、「敷衍せず」ことばの「意味する」範囲内にあるという意味である。「ことば」を並べて「文」とし、「文」を並べて「章」とすることで、その最初から最後まで意味がよく分かるのである。後漢の趙岐ちうぎという人が、この本に注を書いて『章句』と名付けた。そのとおりの名前を使ったのである。

孟子見梁惠王——

孟子の時代は孔子の時代から百年あまりも経つていゝる。孔子の時代は周代の末であつたが、まだ人々は仁義礼智をすべて失つていたわけではなかつた。「それが」孟子の時代になると、ただ功績をあげて利益を追求することばかりを考えて、仁義礼樂のことはまったく關心がなくなつてしまつた。ゆえに孔子と孟子とでは、まったく説き方が変わつてしまつた。孔子は「仁」を説かれた。「それに対し」孟子は「仁義」を併せて説いた。孔子は「徳」を説いた。「それに対し」孟子も「徳」を説いたけれども、「心」と言うことが多かつた。「これらは」すべて故のあることである。孟子の時代は、人々はただ利益ばかりを好んでいたので、この利益を好む心をうち砕くするために「義」を併せて説いたのである。人間の利益を好む心をうち砕くには、「義理」

の心を用いなければならぬからである。「孔子が」「徳」と言い、「孟子が」「心」と言った理由は、どちらも「徳」と言えばよいのだが、時代が下ると、ただ「徳」というだけでは、相手の心にしつかり受け止めてもらえない。だから、直に「心」と呼んで、人に気を付けさせるのである。このようにすれば、誰でも自分自身の心に納得しやすいからである。だから「このように」「仁義」を併称し、「心」を説いたのは、時代が衰えたからなのである。「見」は「みる」と訓むのがよい。「まみゆ」は、出かけていってお目見えをすることである。この「見」は、ただ会うことである。

この時は戦国時代であり、諸国で土を採用して、士がもてはやされた時である。恵王は礼儀を厚くして孟子を招待したため、孟子は梁に出かけていったのである。

王曰叟不遠千里而來亦將有以利吾國乎

「叟」は、「おきな」である。年取った人を呼ぶことばである。「千里」と言うのは、必ずしも「実際に」千里とは限らない。ただ「遠い」ということを言っているのである。「利」と言うのは、「利欲」の「利」であり、「好都合だ」ということである。元々「利」というものはよいことなのであるが、「利する」と言うと、む

さぼって自分に都合がよいことをする、という意味になる。この時、諸国は挙兵して戦争をしていたので、恵王の心は、国を豊かにし兵を強くすることだけを第一としていた。「利する」と言うのは、その事である。これはさしあたり目の前の、自分にとつて好都合なことである。あなたが千里の遠さを遠いとも思わずにやつて来たのは、あなたの場合も、やはり我が国にとつて好都合な提案をなさろうとしているのではないか、と言うのである。この時代の諸子は、みな富国強兵の術を諸侯に勧めていたので、「亦た」と言ったのである。

孟子対曰王何必曰利亦有仁義而已矣

この時代には、世の中に「仁義」のことがなくなつていて、ただ「利」のことばかりを言っていたので、王の質問も「利」についてであった。まずこの「恵王の」「利心」を批判して説き伏せなければ、どんな「道」も説くことができない。だから、まず「利」を批判したのである。あなたは、なぜ利の話ばかりをしようとお思になるのか。それはまったく無用のことです。ただ「仁義」というものがあるだけです。この「仁義」の外には何もありません。○さて、「仁」という字を訓むならば「めぐみ」と訓むべきである。「義」の字を訓むならば「ことわり」と訓むべきである。本心からも

ののあわれを知ることが「仁」である。「本心から」物のけじめを知るのが「義」である。これらは皆本心であわれを知り、けじめを知るのである。あるいは「氣」から出るものもある。見聞から来るものもある。これは本當の「仁義」ではない。本當の「仁義」は本心から湧き出るものである。人々の本心に存在する仁義なのだから、自分自身で考えてみるべきである。「仁義」に似て「仁義」でないものもあるのだ。「而已矣」とは、「この外はない」という意味のことばである。ただ梁王だけではない。士庶人もまた同様である。「ただし」上に立つ人はとりわけそうである。戦国の時代には、やはりこのところを心得ねばならないのである。

王曰何以利吾国——

「王」とは一国の君主のことであるから、ここで王が言っている「利」というのは、国家にとつての利のことである。太夫の場合であれば家のことを言い、士庶人の場合であれば「個人の」身のことを言うのは、言葉の使い方習慣・決まり事である。「万乗」の「乗」というのは、戦車の数のことである。古代「中国」における戦争は戦車戦であったから、軍備として戦車を準備した。その戦車に乗る大将や随行する士卒の数が配置には規定があった。そのために、その国の規模を

戦車の台数で表したのである。さて「この部分では、」目の前の利益を求めるとなれば、損害が後に付いてくる、ということをも、孟子はおっしゃったのだ。利益というものも、その利益を好み追い求めると、却って自分にとって都合の悪いことが側に寄り添ってくる、ということをも、説いているのである。恵王が、どうやって「我が国にとつて」都合がよいようにしようか、とおっしゃったならば、目下の者は目上の者のすることを学ぶものであるから、それから後には、「自分にとつて」都合がよいようにしよう、ということが、そこら中に流行してしまい、おのおのがそれぞれの身分に應じて、あちらでもこちらでも、いろいろとそれぞれ自分自身にとつて都合のよいことをしよう、しよう、と思うだけになり、「その結果、下々の者たちの間には」相手を大切に思い、親しむ心が無くなってしまふであろう。これは「その国が」大変危うい状態に陥り極まつてしまったということである。その国が危ういというのはどうということかという、万乗の国において、その国の君主を弑逆（弑殺）するといった甚だしい悪行を働くのは、必ず権力や勢力、威光や人望を備えた、千乗の大臣の家柄の者である。その国が千乗の国ならば、

「悪行を働くのは」必ず百乗の家柄の者である。そうであれば、そうした悪行を働く者たちは皆、その国全体の十分の一を領有している。「国全体の」万のうちの千、千のうちの百である。すると「彼らが領有している分を」少ないと言うことはできない。それで十分足りるはずなのだが、もし義を後回しにし、利を主として優先したならば、いくら取つても取つても、足らなくなるのも当然である。欲望には限度がないものであるから、君主の国もその位も奪つてしまわないと満足しないようになって、遂には君主を殺害するに至つてしまうのである。そうであるならば一度でも「利益になるようにしよう」と言うことは、大変その国にとつて危ういことではなからうか、と「孟子は」言っているのである。

未有仁而遺其親者也未有義而後其君者也

「仁而：」「義而：」と言うのは、仁義を実践する者は、利益を追求することはしないけれども、自然と利益が付いてくる、ということである。何はともあれ、仁義を追求することだけがよい、と「孟子は」言っているのである。仁愛ある者がその親を棄てて気にもとめないことなどなく、義を知っている者がその君主を棄てて気にもとめないことなどない、ということであ

る。仁愛ある者は親に対して真心のこもつた対応をし、義ある者はその君主に対して真心のこもつた対応をするものである。そうであるから王が仁義を好むと、大夫や士や下々の者の間に、仁義が流行するようになる。そうして「下々の者は」その王を親のように親しんで、「自分がお仕えする」君主として大切に思うようになるのである。そうすると結局はめぐりめぐつて君主自身のためになるであろうから、「君主たる者は」ただひたすらに仁義仁義とだけおしやるべきなのである。それなのにどうして「梁の恵王は」利などということをおしやるのか、と「孟子は」言っているのである。さて仁義というものは、もともと人の本心に備わっているものである。利欲というものは、ふと心が曲がってしまったって、そうなつてしまったという、後からできたものである。「利欲という」後からできたものによつて、本来の自分にもそもそも根ざしている仁義が失われてしまうことは惜しいことである。利欲はほんの目先にあるものであるから、ついそのために「本来の心が」奪われてしまうのである。仁義は忘れやすいものなのである。人々とはこうしたものである。そこで孟子七篇の書においては、こうした点についての議論が中心になっているのである。今の時代の人もこの点につい

てよく理解しなければならぬ。また上は高貴な王公から、下は身分の低い匹夫に至るまでも、この点をよく理解しなければならぬ。利を好む心が深く、そのために仁義の良心を失つてしまえば、終には家・国・天下をも失なつてしまい、その身をも失つてしまうに至るのである。「人間の中に」君子と小人との違いが生じるのも、仁義と利欲との間において「どちらを優先させるかが原因」である。純一である仁義（「の持ち主」であれば、利欲の心はないものである。「逆にその人物の中で」利欲の心が甚しくなると、「その人に」仁義の心はなくなってしまう。だから、聖賢君子である人々は、仁義の心で純一である。君子と小人との中間にある人は、仁義の心も一方にはあるが、またこうすれば「自分にとって」都合が悪いと思う利欲の心も一方にはある。こうした状態（「の人」）にこそ学問が必要なのである。ここで工夫を用いなければならないのである。世間を見れば、人々には皆義理の心が備わっているのである。しかしながら、「自分にとって」都合がよいことをしたい、とも思うのは当然である。だから「誰にでも」利欲の心もあるのである。この「仁義の心と利欲の心との」二通りの心がある中で、「人は」利欲の心の方に引きずられやすいものである。それでも世間の

人が一般に、なんとか暮らしているのは、こちらの利「欲」をあちらから義「理」で押さえ込んで実行させず、あちらで利「欲」が起ころのをこちらから義「理」で押さえ込んで実行させないからである。「但し」これは、「仁義と利欲との」両者が均衡した状態である。なんとか暮らしていったとしても、一度調子がずれると危うい。これは一人の人の心の中についても当てはまる。「人というものは」一方の心では義理を思い、もう一方の心では利を思っているのである。さて「人の心が」利には引かれやすく、義理の方には戻りにくい。これは、大変危ういことである。そこで「己の」身を修める人は、仁義の心で、利欲の心に打ち勝つようにならなければならない。国を治める人は、利心を追い求める流行が世間になくなり、仁義が流行するようにするべきである。さて胸の中で、仁義と利欲とが戦っている時には、いろいろと努力・工夫をしなければならない。子夏のような賢者であつても、こうした点について悩んだのである。よくよく工夫しなければならぬことである。さて「利」というものは、ただ「自分にとつて」都合がよいことであつて、それだけでは悪いことではないのだけれども、それに執着し好むことがあることを、「利する」というのであつて、そうなると悪い

ものになってしまふのである。「利する」ということをさせるのが利心・利欲である。「利する」ようになる」と、たとえ身を滅ぼすまでに至らなくとも、天から受けた大事な本心を失つてしまふようになってしまふのである。何はともあれ仁義の心が、利欲の心に打ち勝つようにするのがよいのである。この利心というものは、どこまでも細かなところにまで入り込んでくるものである。ちよつとした立ち居振る舞いについても入り込むものである。同じようなことであっても、義を実行しようと心が動き出す場合は、ただひたすら自分の都合のよいようにすると較べると、違いがあるのである。この点をよく考えなければならぬのである。君子の心は明らかであつて、後で打つべき手が予め見えるのは、利欲に「心が」くらまされていないからである。小人は、心が利欲にくらまされているために、目先の利ばかりを追い求め、遠くを見ることができな。鳥獸の心がこの小人の心と同じである。人々はよくこの点（＝利欲に心がくらまされないこと）について、力を注がなければならぬのである。

解説

一

『論孟首章講義』の前半、即ち『論語』学而篇首章の講義に於て、石庵が力説したのは、「学」の内容についてである。

「学」とは何を学ぶのか。「道」を学ぶのである。「道」とは何か。「人の道」である。人と生まれたからには「人の道」を学ばなければならない。「道」をさらに分けて言へば、「君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友」の五者が各々のしかるべき道に叶うことである。つまり、君主は君主らしく、臣下は臣下らしく、父は父として、子は子として、各々の道をまっとうすることが「人の道」であり、それを実践できるから「人」と言われるのである。しかしながら、現実には、氣質の偏りや耳目の欲望によつて、人は自分の生まれつきの「道」を失うことがある。それを決して失わないのが「聖人」である。「学」とは、言い換えれば、この「聖人」の道を学ぶことである。

このように、石庵は、受講生を前に「人の道」を学ぶことの重要性を力説した。懷徳堂は、五同志と呼ばれる町人（商人）の経済力を基盤として運営され、受講生のほとんどは大坂の町人たちであつた。しかし、石庵は、商業活動や営利事業について論ずるのではなく、それら

を根底にあつて支える「人の道」を説いたのである。また、これは、ひとり石庵に限られたことではなく、以後の懷徳堂の講義においても貫かれた。懷徳堂では、「商」の基盤となる「人の道」が考究され、講じられたのである。

しかし、「人の道」とは言つても、それは融通の利かない硬直した倫理道徳でなかつた。そのことを明らかにするのが、続く『孟子』の講義である。

後半部、『孟子』梁惠王篇首章で主として講じられたのは、「商」と「利」との関係であつた。梁惠王篇の冒頭は、戦国時代、梁（魏）の恵王と孟子との問答の場面である。当時、戦国の七雄は、覇権をかけて争つていた。諸侯は国力の増強に努め、思想家は各々の理想を胸に諸国を遊説し、王の面前で自説を主張した。孟子に接見した恵王は、さっそく「どのようにして我が国に利をもたらしにくれるのか」と質問した。これに対して、孟子は「王はどうして利益のことばかりお考えになるのですか。大切なのは仁義だけです」と答えた。ここに、「利」と「仁義」との対立が見える。これに対して三宅石庵は、次のような注釈を展開した。

仁義を实践する者は、自ら利益を追求するわけではないが、自然と利がついてまわるのである。胸の内に仁義

と利欲の心が葛藤を起こしたときには、よほど工夫をしなければならぬ。（孔子の高弟の）子夏のような賢者でも、そのことに心を痛めたのである。「利」は勝手のよいものであつて、そのこと自体に差し障りがあるわけではない。しかし、利益を追求することを愛好するようになると、そこに弊害が生ずるのである。

このように、石庵は、伝統的な儒家思想の中では厳しく対立すると考えられてきた「利」と「仁義」とについて、柔軟な思考を展開してきている。つまり、「仁義」の実践者には結果として「利」がついてまわるという前後関係を想定し、また、「利」そのものには害はないが、それを追求する欲望が弊害を生むという形で、両者を統合してみせるのである。

これは、当日の受講生に配慮した結果と言えなくもない。しかし、懷徳堂では、これに先立つ三宅石庵・五井持軒の『論語聞書』（一七〇六〜一七一三頃）や、後の中井竹山の『蒙養篇』の中に、やはり、こうした思考を看取することができ、「利」に対する考え方が、極めて柔軟なものであつたことが分かる（注2）。これも、大坂の町に生まれ、商人によつて支えられた懷徳堂学派の大きな特色の一つである。

また、商人の倫理と言えば、とかく石田梅岩の石門心

字ばかりが取り上げられ、町人哲学者としてその意義が語られている。しかし、梅岩が自宅に町人を集めて講義を開始するのが享保十四年（一七二九）、主著『都鄙問答』の刊行が元文四年（一七三九）であることを思えば、むしろ懷徳堂の先進性が高く評価されるのではなからうか。この石庵の講義は、こうした思想的観点からも注目される。

二

さて、この『論孟首章講義』をデジタルコンテンツ化しようとする場合、問題となるのは、次のような諸点である。

第一は、漢字を中心とした文字処理の問題である。いわゆるJIS外漢字をデジタルコンテンツとして取り扱う場合については、既に幾つかの方策が模索されているが、いずれも根本的な解決を見るには至っていない。特に、インターネット上での公開を念頭に置いた場合、閲覧者側に特別な設備やソフトの負担を強いるのではなく、ごく通常のコンピュータ環境で活用されることが望ましい。

そこで、今回の作業では、学術的な意味での資料提供を基本的な目的としつつも、その上で、技術的な問題を

踏まえ、紙と電子テキストという媒体に応じた修正を適宜加える、という方針で臨んでいる。紙の媒体たる本稿では、前記の凡例に示した通り、俗字・異体字・踊り字などの特殊文字についても、できるだけ原文に忠実に再現しているが、インターネット上での公開を前提とする電子テキストでは、敢えてそれらを作字したり、特別なソフトで表示したりすることをせず、できるだけ通常の文字で代替する、との方針で若干の修訂を加えている。また、ルビもできるだけ多く付け、閲覧可能となるよう配慮しつつ作業を進めている。

第二は、資料の立体化である。『論孟首章講義』を単にテキストファイル化するだけでは、既に明治の末に行われている活字翻刻と大差はないと言える。また、懷徳堂に関する個々の資料を個別にテキストファイルとするだけでは、デジタルコンテンツとして十分な活用には耐えないと思われる。

そこで、今回の作業では、『論孟首章講義』のデジタル画像を撮影・処理して、前記の「本文」「現代語訳」などとリンクさせ、画像資料と文字資料との即時対象が可能となるような設計を試みている。また、こうした言わば静態的資料を、別に作成中の「懷徳堂事典」「懷徳堂年表」「懷徳堂関係論著目録」などにリンクさせたり、他の関

係資料と双方向的にリンクさせるなど、より動的、立体的な資料とすることを目指している。

その結果、凡例に従ってどのように文字処理が行われているかを、翻刻と画像とを対照しつつ具体的に把握することができるようになる。また、『論孟首章講義』前半の主題であった「学」「人の道」や後半で説かれていた「義」と「利」との関係についても、『論孟首章講義』の枠を越えて、懷徳堂関係資料全体での用例検索ができたり、より詳細な解説を参照できる、などが可能となる。

こうした取り組みは、懷徳堂関係資料を、特定の研究者のための閉ざされた情報から、広く懷徳堂関係者の共有し得る開かれた情報へと変容させることになろう。また、「研究」のみならず「教育」という観点から見ても、初学者に対して懷徳堂への興味を喚起し、居ながらにして懷徳堂を「体験」できるようなマルチメディア教材化への道を開くものとなる。

注

- (1) この作業は、現在、大阪大学大学院文学研究科中国哲学研究室に事務局を置く懷徳堂研究会によつて進められている。現時点での研究会の主な作業は、懷徳堂の貴重資料約百点の実見調査、書誌解題の作成、デジタル画像の撮影、

特定された資料の全文テキスト化、「懷徳堂事典」「懷徳堂関係論著目録」の作成など広範な領域に及んでいる。その成果については順次報告していくが、最新の情報については、大阪大学中国哲学研究室のホームページ（平成十二年末現在 <http://bun165.let.osaka-u.ac.jp>）を御参照いただきたい。

(2) 例えば、『論語聞書』子罕篇に「マレニ利ヲノタマフカラハ、ワルヒモノニテハナキ也。利ハ勝手ヨキコト也」とあり、また『蒙養篇』第二十五条に、「商人の利は士の知行、農の作徳なり。皆義にて利に非らず候。只非分の高利を貪るを以て利欲とす、是は姦曲に落て義に背き候」、同・第二十六条に、「町家は、利欲を肝要と心得候は、大なる誤りにて候」などある。